台湾と日本、国際共同の可能性

日本台湾交流協会では、日台文化交流に有意義な催しに後援助成・名義を付与する形で協力しています。ここでは「第七劇場」（三重県津市）と「Shakespeare's Wild Sisters Group」（台北市）による日台国際共同プロジェクトとして台湾で行われた公演の様子をご紹介いたします。

第七劇場 代表・演出家 鳴海康平
Shakespeare's Wild Sisters Group プロデューサー 新田幸生

第七劇場　代表・演出家　鳴海康平

私たち第七劇場は2016年から3年間、台湾の台北を拠点に国際的に活動する劇団“Shakespeare's Wild Sisters Group”と、舞台芸術での国際協働をすることになりました。その1年目となる昨年2016年のプロジェクトは交流協会の後援助成を受けて実施され、台湾公演、日本公演ともに、大きな反響を呼び成功裏に終えることができました。

私たちは、三重県津市の中山間地域である美里町に拠点を持つ劇団です。2014年まで東京にアトリエを構え、そこを拠点に「国境を越えられる作品をつくる」をポリシーとして活動していました。2012年から1年間、代表・演出を務める私がポーラ美術振興財団の在外研修員としてフランス・パリで活動した後、2014年にいろいろな縁から三重県に拠点を移設しました。旧資材倉庫を劇場に改装し、その劇場“Théâtre de Belleville（直訳すると「美里の劇場」）”を新たな拠点として国内外で活動しています。これまで日本国内20都市、国外6都市（韓国・ドイツ・フランス・台湾）で作品を上演してきました。

今回、台湾のカンパニー“Shakespeare's Wild Sisters Group”との国際共同プロジェクトをはじめるきっかけとなったのは、私たち第七劇場の台湾公演（2014年）でした。私たちが東京から三重県津市美里町に拠点を移したその年に、国立台北芸術大学の舞台芸術フェスティバル“關渡藝術節”に招待され、ロシアの作家チェーホフ原作の『かもめ』を上演しました。この作品と私たちを台湾のプロデューサーが気に入ってくださり、今回の国際共同プロジェクトを提案してくださいました。

ただ、ひとつの民間劇団が国境を越えて、海外の民間劇団と国際共同プロジェクトを進めるためには、会場の確保、予算の工面など、多くの困難が伴います。しかし、私たちが拠点とする三重県の県立劇場である三重県文化会館が、舞台芸術によるこの国際交流の意義や価値を理解して、三重県文化会館プロデュースとして力を貸してくださり、そして交流協会が後援助成をしてくださったことで、このプロジェクトの第一歩を成功させることができました。この場を借りて重ねて心から感謝お礼申し上げます。

台湾のプロデューサー・新田幸生さんからの提案で驚いたのは、このプロジェクトを「3年間」の長期計画としたい、という条件でした。日本の舞台芸術の分野では、ひとつのカンパニーが海外のひとつのカンパニーとの協働をする場合、1年ないし1度で区切りとなることが多いですが、近年文化に特に注力している台湾の文化政策の姿勢とともに、プロデューサーの熱意に感動しました。台湾側のファンドレイズの状況を聞く限り、台湾が政策として「アジアの文化中心地およびハブ」となる意志を感じます。そしてはそれは加速度的に実現に進み、舞台芸術に限らず、現代美術などのファインアートの分野においてはすでに東京を超える作品や人材が流通がなされているという声も聞いています。その意味でも、台湾側からの3年という提案は理に適っているといえます。1年では深まりきらない交流や、作品の質を、3年と

いう長期スパンで計画することで、よりお互いを知る時間が増え、親密で良質な文化交流と作品製作と発表が可能となるのはまちがいありません。この点においては日本の文化政策は、台湾から学ぶことが多いのではないかと感じます。

1年目の共同製作は、互いのカンパニーの俳優を交換＝Exchangeして、日台俳優の混成キャストでの作品を、日台各1作品ずつ計2作品を製作しました。テーマは台湾側の提案で、ロシアの文豪「ドストエフスキー」。地域も言葉も時代も歴史も異なる日本と台湾とロシア。共通点は「人間」のみ。できあがる作品は多様性を通して、きっと「人間」について新たな発見、刺激となるはずだと直感しました。今や世界中で「多様性（ダイバーシティ）」「寛容」という言葉が叫ばれています。それはテロや情勢悪化、難民などの複雑な問題と裏表の関係にあるといえるでしょう。そして国外だけではなく、国内でも近年はマイノリティをめぐる課題の解決、社会の成熟化に対しても耳にする機会が急速に多くなった言葉です。文化、特に複数の人間が深く関係する演劇は、多様性や寛容を大きな要件としています。さまざまな考え方や表現、文化を取り込みながら、より良い作品へと昇華させ、一人ひとり考え方が異なる観客と一緒に共有していく作業を、演劇はギリシア時代から脈々と続けてきました。広く考えてみれば、この作業がより良い社会をつくることとまったく同じであるとすぐに気がつきます。この意味で国際共同は大きな可能性を持っています。

劇場文化は、基本的には複数の人間によって準備され、「この時間・あの場所に行かなくてはならない」ために場所と時間の拘束を強く受ける「上演」という形態を持ちます。それは生身の人間が生身の人間に見せる、という特性にも起因します。言い換えれば、簡単に持ち運びもできず、個人的に所有することも難しく、ひととひとがその場に居合わせなければならない、ある意味でとてもアナログな表現／体験形態です。これは舞台芸術がアナログで人間的な営為であるともいえます。

IT技術が発達したおかげで、私たちのプロジェクトのミーティングも、ほぼ国内プロジェクトと同様に進めることができました。たった20年前の状況と比べれば驚くべき発達だと感じます。しかし、リハーサルや上演に関してはチーム全員が同じ場所にいなければならない点は、今も20年前も、そしてギリシア時代から変わりません。おそらくはこれからも変わらないでしょう。だからこそ、舞台芸術での国際交流と文化創造は、これからますますその価値と効果が高まるように私には思えます。人間が人間であることを確認するために、そして個人が価値観が異なる他者とともに共存し、より良い社会を形成するために、舞台芸術のように手間も時間もかかり、拘束性の高いアナログな表現や、それを軸にした交流はとても有効であるはずです。言い換えれば、人間にとって、社会にとって大切な部分を思い出したり、甚大な情報が流れる現代における生産／消費活動の日々の中で摩耗や麻痺してしまう「人間的なもの」を忘れないように喚起できると、私は信じています。

お話しの筋を私たちのプロジェクトに戻しますと、公演の約1年前からミーティングを繰り返し、2016年5月からは、日本と台湾をお互いに行き来しながらリハーサルを進め、互いの価値観や表現を交換しながら両地で作品を練り上げていきました。私たち第七劇場は台湾人女優をひとり迎えて「罪と罰」を、台湾のShakespeare's Wild Sisters Groupは日本人女優をひとり迎えて「地下室の手記」を製作しました。どちらの原作もドストエフスキーの名作であり、150年経った今でも世界中で読まれ続けているそれらの作品を舞台化しました。

2016年11月、まずは台湾・台南市にある台南文化中心で開催された“新舞台藝術節2016”での正式プログラムとして日台2つの作品を初演し、その翌週、日本に移動し三重県文化会館にて日本

公演を行いました。日台それぞれの作品で、２つの言葉が飛び交いますので、上演に際しては台湾公演・日本公演の両方で現地の観客に合わせて字幕を投影しました。

２つの言語が、まるでお互いの言語が通じ合っているかのように会話しながら作品は進行していきます。その同じ作品を、台湾の観客と日本の観客が、海を越えて共有する光景はツアー公演の醍醐味のひとつです。アジアにおいて親日として知られる台湾は、日本のお隣さんともいえる距離にありながら、当然言語も文化も歴史も異なります。同じ作品を観ているのに、笑うシーンや緊迫するシーンなどが違ったりもしますが、終演後に大きな拍手を送ってくださった点と多くの好評をいただけたことは変わらず、私たちの協働作品が台湾と日本の観客に、日台の文化交流と作品創造の新しい形を提示できたと感じられたことは大変うれしいことでした。そして、まだまだ日本では触れる機会が少ない台湾の演劇作品を紹介できたこと、これからの社会に必要な体験、そしてもっと日常的となるであろう多様性や寛容という局面の一端を、良質な舞台芸術を通して、まずは私たちが体験し、その結実である作品を日台両公演で観客に体験してもらえたことも、やはり大きな喜びでした。

私たちが台湾人女優とともに製作した「罪と罰」は、原題に使われている「罪」と「罰」の言葉に宗教的な意味合いがあります。ただ、世界中でテロが頻発し、難民が溢れ、近代や資本主義がある種の壁にぶつかった現在、そしてそこで生きる私たちにとっては、また別の意味合いが色濃く映るように私は感じています。主人公であるラスコーリニコフはひとの痛みがわからないだけではなく、自分の痛みや幸福すらもわからない、それどころか何に対しても心が動かないことを「自分でわかってしまっている」ことが苦しい、私にはそう思えます。今の時代において、これは決して特殊なことではないのかもしれません。物語の最後まで改心も後悔もしなかった彼は、最後にひとりの女性との間に愛を感じます。ドストエフスキーが最後に書いているように、物語はその愛からまた新たに始まるのでしょう。そして同時に、愛に至るまでの過程こそが、長大で深遠な物語になりえるのでしょう。

言葉も文化も歴史も異なる日台の国際協働は、お互いの間にある隙間をひとつずつ確認し埋めていく作業が何よりも大切だと感じます。薄い紙を一枚一枚重ねていくようなこの作業が、物語のはじまりに至るための、大切なもう一つの物語だと感じています。

今年 2017 年、私たちのプロジェクトは 2 年目を迎えます。昨年の経験を活かし、今年は日台の俳優で 1 つの作品を、日台の演出家 2 名の共同演出で製作します。11 月に日本公演（三重県文化会館）、12 月に台湾公演（台北市内）で上演が予定されています。すでに準備が進められ、また台湾チームで会える日が待ち遠しく感じています。

このプロジェクトに関わったすべての友人に、協力や支援をしてくれた方々、劇場でこの物語に立ち会ってくださった方々に、心から感謝しています。そして台湾チームの親愛なる仲間たち、台湾であたたかく私たちを迎えてくださった台南文化中心のスタッフのみなさん、日本公演の主催として多大なる助力をくださった三重県文化会館、最後になりますが後援助成をしてくださった交流協会に、この場を借りてあらためて厚く御礼申し上げます。

Shakespeare's Wild Sisters Group　新田幸生

人間が愛するのは平穏だけではないんじゃないか？
苦痛を同じくらい愛することだってありえる。
いや、人間がおそろしいほど苦痛を愛し、
夢中になることがあるのも、まちがいなく事実だろう。

―「地下室の手記」より

2,163キロの距離、60分の時差、3.5時間の飛行機、台湾と日本は近くて遠い。この「台湾」という島は、多くの看板に日本語が書いてある。本屋に行けば日本雑誌の翻訳版が平積みされている。

「なぜ台湾人は日本語がうまいのですか？」

それはドラマやJポップを通じて覚えたと言う人と、日本統治時代に日本語教育を受けた人が多いからだと思います。その日本の歴史の一部を共有していたことから生まれた「親日」は、日本人としてはちょっと想像できないことかもしれません。だから地理的な距離より、もっと知りたいのは、なぜ日本人は台湾のことをあまり知らないのか、ということ。経済や貿易以外に、どうすれば文化を通じてお互いの対話と理解を深められるか、どうすれば似ているところと違うところを交流できるか、と私はずっと考えていました。

小学校の時、よく学校の友達から「ハーフ」(half) と言われました。「半分」と言うと、なんか片方の何かが欠落しているみたいで、私の青春期はずっとこの「アイデンティティ」の失くした半分を探していました。高校の頃、台湾の友人の多くは日本に憧れていて、でも台湾と日本は近くて遠い。まるで届かない片思いのようなこの気持ちは、90年代の私の思春期でした。その台湾と日本の「ハーフ」や「合いの子」である自分のことが、ある時期私はとても嫌でした。自分自身がどっちの「グループ」なのか混乱してしまうことがあって、自らの心に深い郷愁を覚えさせられました。でも人生というのは不思議で、演劇に出会って、以前は私の一番自信のない部分が、今では国境を越える翼になりました。

演劇は、人と人とのやりとりの芸術です。さまざまな人を繋げることができる。そしていろいろな世界を同じ時に、同じ場所で共有する。その場所は国籍とは関係がない。

劇場はそれぞれの物語、それぞれの想いが集まる場所です。そこで私は気がつきました。劇場の入り口は、別の世界へ通じる扉でもあることを。すべての人が経験したモノやコトは、この世界を見て理解するためのフィルターであり、劇場を構成する材料にもなる。それぞれの国で生まれ育った私の経験が、私たちをこの場所まで導いてくれたと思います。はじめて第七劇場の作品を観たのは2011年のパリ、そして2013年の大雪の降った日、茨城県土浦で第七劇場の劇団員と再会し、2014年に台湾公演に招聘しました。そしてついに2016年から3年間の日台共同製作を始めました。

たとえ言葉も文化も歴史も異なる、日本と台湾の劇団であっても、必ず国際共同の可能性があると思います。1864年に出版されたドストエフスキーの「地下室の手記」。この152年間で様々な理論や視点から解読され、地下室というものはさまざまな意味を押し付けられてきました。でも、劇場は疑問の答えを探す場所ではないと私は思うのです。劇場はいろいろな疑問が生まれる空間だと思います。作品の意味とは？演出の方法とは？などなど…。作品の中で答え見つけられることはなく、答えはこの先の人生にあるかもしれない。でもその疑問自身は、今私たちの生活から忘れられた自分自身の一部分、思考能力の一部だとも思います。だから「日本」と「台湾」の2つの劇団による3年間の国際プロジェクトより、この繋がりで出会った人たちは、何よりも大事で、何よりも幸福なことだと思います。

私たちは今、同じ時、同じ場所で、時間と国と言葉を越えて、同じ記憶と体験をつくりました。どうしてこの企画はこの2つの劇団なのか、三重と台北の歴史と文化はどんな関係があるのか、そういえば、私にもその理由がわかりません。でも2つの劇団から信頼関係を築くことができれば、町と町、国と国、きっともっと近くなれるはずです。だから今私たちが一緒に作る作品は、とても

大切な、目に見えないの「縁」が生まれると確信しています。初対面の人や、世代や国が違う人でも、話をすれば、演劇をつくるときと同じように、何かしらの共通点があります。お互いに違う立場でも、別の見方ができて、話は広がっていきます。そしてこの小さい縁から縁を結んで、それからまた次に次に違う縁を運んできてくれる。

だからこそ、好きな作品を違う国に持ち込み、好きな人たちを同じ場所に集まってもらい、まるで地元のように異郷で暮らし、まるでずっと前から知り合ったように世間話をすることは面白い。日常を生きるための力を取り戻したくて、ありふれた日常からこの劇場に入った人がいるかもしれない。私たちは、劇場の中の世界をより遠く広げるために、この3年間、日本と台湾を、台北と三重を何回も行き来してきました。そのおかげで日本と台湾でかけがえのない人々との出会いに恵まれました。日本人と台湾人の友達とともに笑うことができる。お互いの笑顔を共感できる時もどんどん増えてくるように、「距離」の壁を乗り越えることができれば、きっと自分だけではなく、もっと日台のみんなを幸せにする明るい未来が待っていると信じています。

最後に、2016年から、あるいは未来に、私たちと一緒にこのプロジェクトを完成させていくであろうすべての友人たちと、翼をくれたこの2つの国に、心からの感謝をこめて、お礼を申し上げます。ハーフとしてバイリンガルとして、一番台湾と日本の文化を理解できる橋になれたこと、どちらの言葉もわかるからこそ、どちらに行ってもあたたかく受け入れてもらえました。うん。そうだ、ハーフに生まれて良かった。

●第七劇場

1999年、演出家・鳴海康平を中心に設立。言葉の物語のみに頼らず空間や身体とともに多層的に作用する表現が評価される。内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内20都市、海外4ヶ国6都市（フランス・ドイツ・韓国・台湾）で作品を上演。鳴海がポーラ美術振興財団在外研修員として2012年から1年間フランス・パリで活動した後、2014年、東京から三重県津市美里町に拠点を移設。Théâtre de Belleville のレジデントカンパニーとなる。

dainanagekijo.org

● Shakespeare's Wild Sisters Group
（莎士比亞的妹妹們的劇團）

1995年夏に設立。「シェイクスピアの妹たち」の意である劇団名は、イギリスの作家ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋（A room of One's Own）』の登場人物が由来。独創的な美学とスタイルを模索し続け、毎年実験的な新作の発表と国内外との文化交流を行う。1997年以降、多くの国・都市に招かれ、これまでに香港、マカオ、北京、青島、釜山、東京、ベルリン、シンガポール、神戸、パリ、アヴィニョンなどで公演。

swsg95.com.tw

●新田幸生

日本生まれ台湾育ちの独立プロデューサー、国立台北芸術大学大学院アートマネジメント修士課程卒業。フリーの舞台制作者として、演劇とダンスの舞台制作やフェスティバルの制作に関わり、台北を中心に日本やアジアとの国際交流に深めるプロジェクトを数多く手がける。

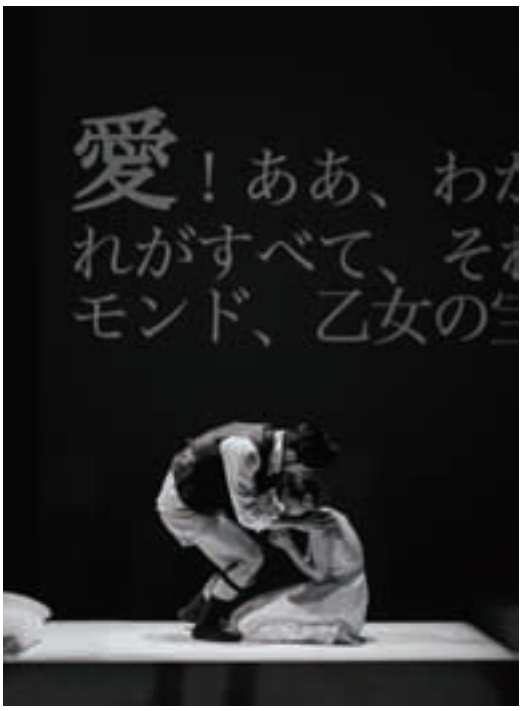
●王嘉明 Chia-Ming WANG

20 年以上、先進的な演劇を製作し続け、常に伝統と革新、大衆性と前衛性を融合させた作品を発表。その作品は核心を失うことなく、広く市民に享受されており、大言壮語のない実験といえる。近年は賛否両論を起こす言語表現や演劇の音/音声のパフォーマンスの新しい可能性の探求に取り組む。限界を拡張するだけではなく、総合芸術としての演劇の定義を豊かにするために、ジャンルを越境してアーティストと協働。演劇に加えて、広告 CM のアシスタントや、ミュージックビデオ、ファッションショーのディレクター、高雄ワールドゲーム 2009 のオープニングアクトのディレクターを務める。

●日本公演フライヤー

●舞台写真（撮影：Lafun Photography）
罪と罰

地下室の手記



●日本公演終了後の集合写真（撮影：松原豊）

●日台国際共同プロジェクト

【台湾公演】
新舞台藝術節 2016 公式プログラム
会場：台南文化中心原生劇場（台南市）
開演日時：2016 年 11 月 18 日（金）
　　19：30 / 19 日（土）
　　19：30 / 20 日（日）14：30
主催：中國信託文教基金會　莎士比亞的妹妹們的劇團　第七劇場
助成：台北市文化局　國藝會　財團法人建弘文教基金會
　　信源企業股份有限公司　財團法人許遠東先生暨夫人紀念基金會
　　公益財団法人交流協会
指導単位：文化部

【日本公演】
平成 28 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
三重県文化会館プロデュース
会場：三重県文化会館小ホール
開演日時：2016 年 11 月 26 日（土）
　　18：00 / 27 日（日）14：00
主催：三重県文化会館［指定管理者：(公財)三重県文化振興事業団］
共催：レディオキューブ FM 三重
助成：文化庁
製作：三重県文化会館　第七劇場
　　Shakespeare's Wild Sisters Group

●作品情報
【日本作品】
第七劇場 Dainanagekijo
原作：ドストエフスキー
構成・演出・美術：鳴海康平
出演：
小菅紘史、伊吹卓光 / 八木光太郎 / 堀井和也
+蔡亘晏 Hana TSAI（Shakespeare's Wild Sisters Group）
照明：島田雄峰（Lighting Staff Ten-Holes）
音響：平岡希樹（現場サイド）

【台湾作品】
Shakespeare's Wild Sisters Group
原作：ドストエフスキー
構成・演出：王嘉明 Chia-Ming WANG
美術：鳴海康平（第七劇場）

出演：
Fa
王世緯　Jasmine WANG
王安琪　Angie WANG
張耀仁　Yao-Jen Chang
+佐直由佳子（第七劇場）

舞台監督：鄧湘庭 Hsiang-Ting TENG
照明：王天宏 Tien-Hung WANG
音響：劉韋志 Wei-Chih LIU
衣装：靳萍萍 Pin-Pin CHIN
演出アシスタント：盧琳 Lin LU
プロデューサー：新田幸生